



再びの旅II (ポーランド～チェコ) 林 保明



『旅は面白い!』

2009年7月、14年ぶりに訪れたワルシャワは近代的な都会に生まれ変わっていました。それからまた14年「今はどうなっているのだろうか?」とふと考えてみます。

新型コロナは終息したものの、ウクライナ・ロシア間での戦争は相変わらず続いています。ニュース報道で知る限り西欧社会の日常は支障なく営まれているようですが、ウクライナから東へ観光目的で行く事はまだまだ出来ない気がします。そこで今回も14年前に戻ってポーランドの古都クラクフからチェコの首都プラハに至る旅行を振り返ってみようと思います。

2009年の旅の目的は、生業である技術者としての国際学会への参加なのですが、論文発表は無く、まさに参加するだけの旅でした。どっさりもらった資料を、記念のバックと共に日本に送ってしまおうと駅前の郵便局へ行きました。

バックを見せながら「日本に荷物を送りたいのですが・・・」(昨日覚えたポーランド語)、すると窓口のおばちゃんが、何か言いながら伝票を渡してくれました。でも、上下の欄のどっちが宛先の住所なのかわかりません。おまけに字が小さくて全部ポーランド語で書いてあります。「困ったなー・・・!？」

おばちゃんは全然困ってなく、ポーランド語でまくし立ててきます。後ろには人が並び始めました。仕方無しに、すぐ後ろの若い女性に聞いて見ました。「Where is address?」(こんな英語で良いのだろうか・・・!?)



クラクフの郵便局 (2009年7月、ポーランド)

ともかく宛名書きを何とかクリアすると、今度は量りに乗った荷物を指差して何か言っています。どうも4キロを少し超えただけで、料金が高くなるらしいのです。(だからと言って、どうすりゃ良いんだ!?)

何か反応を示さないと先に進めない様子なので、仕方無しにバックのポケットから肩紐を取り出すと4キロ以下に成りました。おばちゃんは満足そうな顔をして、今度は伝票の中ほどの欄を指差して何か言っています。「あー、何が入っているか書くの?」、思わず日本語で聞いてしまいました。

おばちゃんが頼いたので(日本語の方が通じる?)、ポーランド語会話集から本とお土産と衣料と言う単語を探して書くと、まだ何か言っています。「ん〜?、何だろな・・・?」、そのうち日本から送った時に、保険の評価額を書いた事を思い出しました。適当にズオティ(ポーランドの通貨)で書くと、ちょっと眺めて頷きました。(遠くにかざして見たのは僕と同じだ?!)

すると今度は紙と紐を持って来て包装をしてくれるようです。(オー、親切じゃん!) 綺麗に包んでくれて量りに乗った荷物を見ると、4025グラム!

おばちゃんはバツの悪そうな顔をして209ズオティ(約6千円、4キロ以下だと3500円)の伝票にサインをしろと言います。

かくして40分間の死闘は、ようやくと終止符が打たれました。





クラブは美しい街です。（2009年7月、ポーランド）

『ポーランドの旧都クラクフ』

学会のオープニングセレモニーはポーランド最古のヤギェウォ大学のホールで行われました。卒業生には地動説で有名なコペルニクスもいます。

音響関係の学会（ICSV）ということで、オーデトリウムの中央にはグランドピアノが置かれ、トランペットのファンファーレに続き、ショパンのピアノ曲の演奏が始まりました。

ここクラクフの旧市街、中央広場に建つ聖マリア教会の塔からは、毎時トランペットの音色が聞こえてくるのです。

また、クラクフにはマンガ館というミュージアムがあり「何だろなあ？」と思って行くと、フェリクス・”マンガ”・ヤシェンスキと言う、北斎漫画を愛した日本美術品収集家の寄贈品を展示した博物館でした。

なお、建物の設計は日本の建築家、磯崎新が無償で行ったのだそうです。

正式名称は日本美術技術博物館“マンガ”館、ヴィスワ川畔の美しい風景の中で、日本文化を堪能出来ます。







『旅は道連れ……?』

クラクフからチェコのプラハへは、急行列車で移動しました。事前にインターネットで調べると、この区間では国境を股に掛けた国際窃盗団が活躍していると言います。乗車時間が6時間以上かかるので、心して出掛けて行きました。

プラハ行きは朝6時53分発、動き出すと間も無く、それらしき(?)若者が僕の前の席に座りました。周りはいくらでも空いているのに、ボックス席になっている向かい側に座ったのです。

どう見ても普通の若者ですが、こういうのが危ないのです。アタッシュケース1つと荷物が少なく、乗車券らしきものを何枚も持っています。僕が寝ている隙に、網棚のスーツケースを持って行けばコンピュータとカメラが手に入るのです。

「行ったり来たりしながら稼いでいるのに違いない!」とにらんだ僕が、隙を見せずにいると、次の停車駅で前の車両に移動して行きました。

チェコ国境を越えたオストラヴァという駅からは、打って変わって小学生(中学生かな?)くらいの可愛い女の子が乗ってきました。お母さんが見送りに来ています。夏休みなので田舎に行くのでしょうか?



僕の方をちらちら見ながら、パズルの本を解いているのですが、僕に興味があるらしく、目で話しかけてきます。(誘惑には乗らないぞ!) と思いつつも、「パズル?」と尋ねると、ウンと首を振ります。でも何故か言葉は出ません。そんなこんなで、目と目での会話が続き、パズルの写真を撮るのをきっかけに、仲良し(?) になりました。

しばらくすると、さっき消えた国際窃盗団がまた戻ってきて、今度は通路を隔てた反対側の席に座りました。(怪しいやつだな・・・!) 彼もデジカメを持っていて、女の子に「撮っても良い?」と聞くのですが「ノー!」と女の子、(ざまあ見ろ!)

と言うことで国際窃盗団の難も逃れ、気を良くしてプラハ中央駅に着いたのですが、最後の最後に気が緩んだのか、ホテルまで乗った白タクにボラれてしまいました。(チクショウ!)



『歴史の街プラハ』

プラハは建築と音楽の街です。街中が博物館みたいで、古い中世からの建物が並び、世界中から来た観光客が溢れています。

スメタナで有名なヴルタヴァ (モルダウ) 川が街の中心部を流れ、美しく装飾されたカレル橋が新旧の街をつなぎ、チェコを代表する作曲家ドヴォルザークの博物館もありました。



プラハ旧市街 (2009年7月、チェコ)



スメタナの交響詩『我が祖国』の第2曲を口ずさみ、ドヴォルザークの新世界「遠き山に陽は落ちて〜？」などと歌いながら、一日乗車券を使って市内を歩き回りました。



ドヴォルザーク博物館 (2009年7月、プラハ)

特筆すべきはこの国にしかない、キュービズムの建築がいくつもあることです。そんな建築博物館のような街を日がな一日歩き回るので。



『チェコと言う国』

旧東欧の小国チェコ共和国についてはあまり知らないのですが、過去2回行った印象ではチェコの人々は親切です。喫茶店で荷物を置きっぱなしにしてトイレに行くと、戻って来るなり「あんた、こんなところに荷物を置きっぱなしにして出て行ってはだめよ!」と家族連れの奥さんに怒られ、駅でワルシャワに帰る切符を買うのに手間取り、後ろのキャリアウーマン風の人に聞くと、列を離れインターナショナルの窓口まで案内してくれました。

今年の春 WBC 世界野球の予選が日本で開かれた時、チェコの代表選手が来ていましたが、日本人選手と気さくに接する彼らの人となりを見て、14年も前のそんな出来事を思い出しました。



「経済的にはどうなのだろう?」と思い調べてみると、チェコはヨーロッパ屈指の工業国で、かつては人件費も安く日本も含め自動車メーカーの工場がたくさんあるようです。

しかし日本のトヨタのチェコ工場では部品不足から今年2月の生産を中止したり、新型コロナ以降、戦争も加わり半導体やエネルギー不足の影響は世界中に及んでいるのでしょう。

そう言えば「ロボット」という言葉はこの国の作家、カレル・チャペックの戯曲で生まれ世界中に広がったそうです。チェコは人形劇も有名ですね?

『戦争の行方』

この街では銅像をよく見ます。カレル橋の上、建物の入り口、市街地の広場・・・、それらは戦いの勇士であったり、かつての国の君主、キリスト教の聖者など様々であります。

プラハ本駅1番線ホームには親子の銅像がありました。

第2次世界大戦下、チェコスロヴァキアのユダヤ人の子どもたち669人をイギリスに疎開させて命を救った、イギリス人ニコラス・ウィントン氏の銅像だそうです。

この国にも負の遺産が沢山あります。この翌年にはテレジン（かつてのナチの強制収容所跡）を訪れましたが、その話はまたの機会にしましょう。

折しもゴールデンウィーク後の広島ではG7サミットが開かれ、ウクライナからゼレンスキー大統領が電撃訪問、米大統領はF16戦闘機の提供を容認しました。

報道では、サミットは成功裏に終わったと言うけれど、「いったい誰にとっての成功なのか？」と、ふと思います。

僕には第二次世界大戦終結の地広島で、核軍縮も禁止条約の話も無く、第三次世界大戦の引き金に手を掛けたような会議だった気がしてなりません。





ユダヤ人街の教会 (2009年7月、クラクフ)

G7の首脳達は広島で何を祈ったのでしょうか？